

農林水産大臣賞

あしの 芦野の里づくり委員会(栃木県那須町) なすまち

みんなでいきいき里づくり

那須町は栃木県の最北端に位置する町です。芦野地区は、明治維新まで那須氏の一族芦野氏の城下町、奥州街道最北端の宿場町(芦野宿)として発展してきましたが、明治24年の東北線開通時に、芦野地区より6km北の黒田原地区に鉄道駅が設置されてから、人と物の流れが駅周辺に移行することとなりました。さらに、昭和の合併では役場本庁舎も黒田原地区に移り、経済発展から遅れをとるようになり、地域の活気も薄れてくるようになりました。そこで平成元年、有識者等が立ち上がり、地域に残る自然や文化遺産を活用しながら住民の自主的活動により芦野の里づくり、誇れる街づくりを推進することを目的とした「芦野の里づくり委員会」が結成されました。

委員会では、地域活性化の事業として、歌枕の地でもあり、松尾芭蕉ゆかりの地でもある「遊行柳」^{ゆぎょう}周辺の維持管理や、「田植え祭り」などのイベント開催、地区内団体の事業(柳祭り全国俳句大会・聖天花火大会など)後援等を通じて、いきいき里づくりを目指し活動してきました。

芦野地区は、奥州街道の宿場町として栄えたことから、地区内に当時の賑わいが偲ばれる史跡などが数多く残っています。特に、遊行柳は西行、松尾芭蕉、与謝蕪村ら、多くの俳人が題材としてことで知られています。西行が詠んだ「道のべに清水流る柳かげしばしとてこそ立ち止まりつれ」という歌は、鎌倉時代に「新古今和歌集」に入撰されました。以降、多くの人を訪れ、歌枕にもなる名所となりました。遊行柳という名称は、遊行上人がこの地を訪れた際、柳の精を成仏させたという伝説をもとに、室町時代の能楽師の観世信光が謡曲「遊行柳」を創作したことに由来します。そして元禄年間に松尾芭蕉が訪れ、「奥の細道」に記述されるに至り一躍有名になりました。その後、与謝蕪村も遊行柳を訪れ、「柳散り清水かれ石ところどころ」という句を残しています。このように、遊行柳は、地域住民のシンボリックな場所であり、芦野地区を訪れる観光客にも誇れるものです。

また、芦野地区は米どころとしても有名で、良質の米を算出する農村地帯でもあり、山里の農村の原風景を感じられるところでもあります。

これらの地域資源を活かし、地域の活性化を図るため、委員会において、松尾芭蕉が芦野を訪れた時期にあわせ、10年ほど前から地域で農耕馬を所有する方の協力を得て「田植え祭り」を行っています。馬による代掻きの後、地区住民らが早乙女姿で田植えを行う姿は、芦野の田園風景に映え、芭蕉が「田一枚植えて立ち去る柳かな」と歌った情景を彷彿とさせるものであり、年々多くの方が訪れる定着した行事になっています。

また、小・中学生、高校生を含め地区住民が参加する「芦野ふるさと俳句大会」には、委員会も協力し情操教育、文化の香る地域づくりにも努めています。

さらに、遊行柳を中心とした周辺農地・農道・用排水路等の維持管理を行い、町の助成を活用して、ポピーやヒガンバナといった景観形成作物の作付けを図るとともに、中山間直接支払事業により耕作放棄地を防止するなど環境整備、景観の維持に努めています。

今年度は県の事業である「とちぎ夢大地応援団」(都市住民によるボランティア活動)の協力を得て、館山城址の整備を開始しました。

また、鉄道会社が運営するハイキングイベントにおいて、栃木県立那須高等学校リゾート観光科の生徒らが、芦野地区等を訪れる新コースを企画し、住民と生徒らが協力して参加客をもてなすなど、芦野地区のこれからを担う世代の育成もはじまったところです。

委員会では、今後もさらに活動の場を広げ、地区住民が誇れる地域づくりをすすめていきます。



地域のシンボル「遊行柳」